



写真-1 生駒山中腹から千種川を撮影（令和4年4月撮影）

■ 生駒山中腹からの眺望、最高！

上の写真-1は、生駒山*1（標高260m）の中腹から千種川を撮ったものです。登山口から登り始めて約20分でこの眺望が望める地点に着きました。4月下旬の快晴の日で、汗だくになりながらの登山でしたが、この眺望に出会って登ってきた甲斐がありました。

千種川に架かる橋は、左から町道井上上町線・隈見橋（くまみばし）、（一）236号上郡停車場線・上郡橋、山陽本線・千種川橋梁、（主）5号姫路上郡線・上郡あゆみ橋です。

さらに登ると、千種川の左支川・鞍居川に架かる国道373号*2・建武橋（けんぶし）を望むことができます（写真-2）。

今回は、せっかく生駒山に登っていい写真が撮れたので、前回の上郡橋に続き、建武橋と隈見橋の歴史についてまとめてみました。



写真-2 鞍居川に架かる国道373号・建武橋（生駒山中腹から撮影）

※1 生駒山：中世には駒山城という山城があった。南北朝時代（14世紀）の築城とも伝えられているが、現在残る縄張りや、戦国時代（16世紀）後半のものと思われる。二つの尾根を中心に、曲輪（くるわ）跡や石積・土塁・堀切・井戸跡などが残っており、瓦や備前焼などの戦国時代の遺物も採集されている。後の近世城郭につながる特徴を持つ中世の山城として貴重な城跡である。

※2 国道373号：赤穂市から、岡山県を経由して鳥取県鳥取市に至る総延長116.8kmの一般国道である。昭和50（1975）年4月1日、県道赤穂佐用線は一般国道となった。起点は、赤穂市の有年原交差点（国道2号交点）、終点は鳥取市の鳥取県庁・鳥取県警察本部交差点（国道53号終点）である。江戸時代は、姫路城下から鳥取城下へと至る智頭往来の一部であり、鳥取藩が参勤交代の際に利用し、沿線には宿場町が整備されるなど、主要街道の1つであった。

■ 鞍居川に木橋が架かる

明治 41 (1908) 年に発行された『赤穂郡誌』には、「鞍居橋は、上郡駅より佐用郡を経て因幡に通じる県道にあり、明治 21 (1888) 年鞍居川に架設し長 45 間 (≒82m) あり」と記されています。この橋は、いわゆる土橋 (木橋の一種で、橋面に土を置いてならした橋) で、その基礎と橋杭を石材で構築しています。県道 (現・国道) の改修に伴って架設されたもので、同年 1 月 18 日に開通式が行われています。神戸又新 (ゆうしん) 日報の 1 月 22 日の記事には「県下赤穂郡坂越港より因幡美作に通ずる県道線路中、最急流と聞こえし鞍居川の鞍居橋は、かねて工事中なりしところ、この度竣工せしにより去る 18 日その通行式を行いたる由」と伝えています。

『上郡町史・第 2 巻』によると、明治 23 (1890) 年 9 月 17 日の洪水では、「鞍居橋のために土砂が堆積し、これに起因して大雨の時に鞍居川の水流を逆流させ、堤防決壊を起こしたため大災害を招来し住民生活に多大の支障を与えた」と記されています。鞍居川の河床に 8 尺 (≒2.4m) 以上の土砂が堆積したそうですが、千種川本川の背水の影響が大きかったのでしょう。

そして鞍居川は 2 年後の明治 25 (1892) 年 7 月 23 日の大洪水により再び氾濫します。

大正 9 (1920) 年 8 月 24 日の「大阪朝日新聞神戸附録」に「赤穂地方は 20 日夜暴風雨となり、千種川出水して 21 日午後 7 時に水嵩 14 尺 (≒4.2m) に達し、鞍居橋および坂越仮橋 (赤穂市) 流出 (流失) せり」と報じられています。

右下の写真-4 は、昭和 6 (1931) 年頃に鞍居川が千種川に合流するあたりで撮られたもので、正面には鮎狩りの屋形船が、後方には赤岩ヶ端 (はな) と鞍居橋 (木橋) が写っています。鞍居橋は、大正 9 (1920) 年の洪水により流失後、架け替えられたようです。



写真-3 木造の鞍居橋 (『むかしの西播磨』から引用・加工)

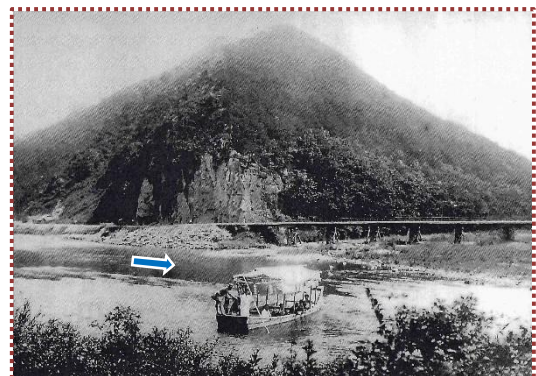


写真-4 千種川の鮎狩り・後方の橋は鞍居橋 (昭和 6 年頃)
(『赤穂・相生・上郡・佐用今昔写真帖』から引用・加工)

■ 鞍居橋から建武橋へ

鞍居橋が永久橋 (コンクリート橋) に架け替えられたのは、昭和 7 (1932) 年 7 月 1 日のことです。「大阪朝日新聞神戸附録」の 7 月 2 日の記事に、「上郡町建武橋 (元鞍居橋) は竣工を見たので 1 日午前 9 時から雨中渡り初め式が挙行された」とあり、「延長 90m、幅 6m のモダンな橋である」と紹介されています。

橋名は、「建武の新政」の頃の赤松則村^{※3}と新田義貞の攻防の故事にならって「建武橋」と改称されたそうです。ただ、そうであれば「けんむばし」と読むはずですが、親柱にも刻まれているように読み方は「けんぶばし」となっています。上郡町郷土資料館の方の話では、「地元の方は「けんむばし」と呼んでいます…」とのこと。

また、鞍居橋があった証として、その親柱が建武橋南詰に設置されています。(写真-5)
なお、昭和 57 (1982) 年 9 月に竣工した現在の建武橋 (写真-7) は、4 径間ポストテンション方式の単純 T 桁橋で、橋長 92.28m、幅員 9.75m (車道=7.25m、歩道=2.5m) です。



写真-5 「鞍居橋」の親柱

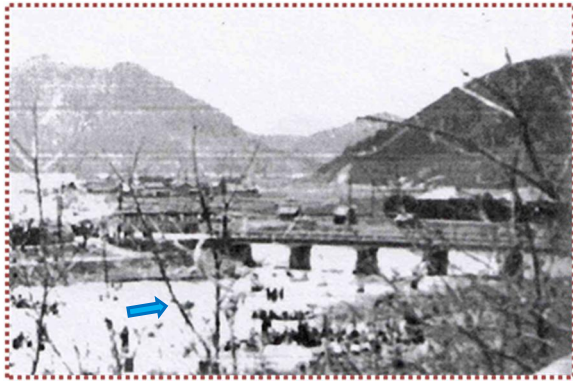


写真-6 昭和27年頃の建武橋
 (『赤穂・相生・上郡・佐用今昔写真帖』から引用・加工)



写真-7 建武橋 (令和4年4月撮影)

※3 赤松則村：出家後に円心を名乗る。鎌倉時代から南北朝時代にかけて活躍した武将で、建治3（1277）年播磨国佐用庄赤松（現・上郡町赤松）に生まれる。元弘3（1333）年則村57歳の時、後醍醐天皇の皇子である大塔宮護良親王（もりよしんのう）の令旨を受けて幕府打倒の兵を挙げ、山陽道を東上して京へ進攻、六波羅を攻め落とすなど建武政権の樹立に多大な功績を挙げる。

しかし、政権内部の対立から護良親王派として失脚、足利尊氏が政権に反旗を翻すと行動を共にして政権方と戦う。尊氏が敗れて京を追われると、九州へ下って態勢を立て直し、朝敵となるのを免れるため後醍醐天皇と対立する光厳上皇より院宣（いんぜん：上皇または法皇の命により、院庁の役人の出す公文書。天皇の詔勅に相当する）を得ることを尊氏に進言したといわれている。

その後、新田義貞率いる6万の追討軍を白旗城（上郡町赤松にあった山城）で50日余り釘付けにして進撃を防ぎ、勢力を盛り返して東上してきた尊氏と合流して京へ攻め入るなど、室町幕府成立の立役者となった。

この功により、則村は播磨国守護職に任命され、その後の守護大名赤松氏興隆の基礎を築いた。貞和6（1350）年京都七条の邸宅で74歳の生涯を閉じた。上郡町苔縄の法雲寺に供養塔がある。



図-1 建武橋・隈見橋周辺の地図



写真-8 上郡町苔縄にある赤松家菩提寺・法雲寺

■ 隈見橋の前身は板橋

右の写真-9の中央に写る板橋が、現在の隈見橋の前身と思われます。背後に写る木橋が鞍居橋なので、この写真が撮られたのは昭和6（1931）年以前です。

隈見橋の橋名は、地元で呼んでいたこの川の名称「隈見川」に由来します。ちなみに下流の赤穂では「熊見川」と呼んでいました。

なお、「隈」は、道や川の曲がって入りくんだ所や、そのような所にできる物陰をいい、蛇行を繰り返している川の状態に由来があるようです。

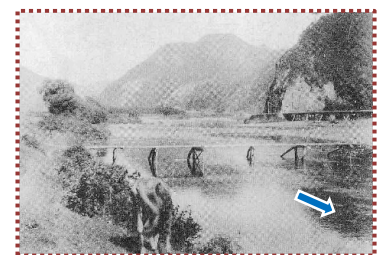


写真-9 (『むかしの西播磨』から引用・加工)

■ 隈見橋（木橋）意外に長持ちするも、昭和 38 年 7 月豪雨で半分流失

昭和 38（1963）年 7 月 11 日の大洪水により、隈見橋（木橋）は左岸側の半分を残して流失してしまいました。近くの上郡橋や建武橋が永久橋に架け替えられている中で、この頃まで木橋として存在していたことが信じられません。昭和 39（1964）年に永久橋に架け替えられ、平成 6（1994）年に改修が行われています。



写真-10 昭和 38 年の隈見橋（流失前）
（『赤穂・相生・上郡・佐用今昔写真帖』から引用・加工）

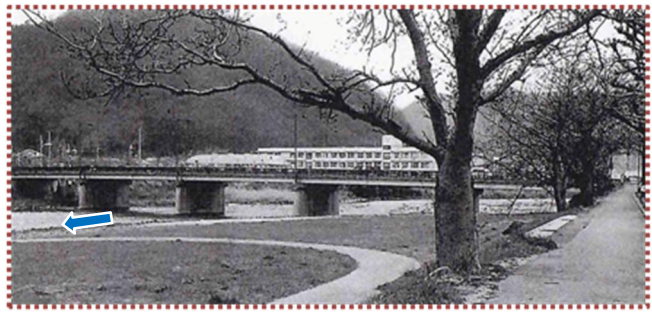


写真-11 昭和 39 年に架けられた隈見橋
（『赤穂・相生・上郡・佐用今昔写真帖』から引用・加工）

■ 現在の隈見橋

現在の隈見橋（写真-12.13）は、千種川床上浸水対策特別緊急事業の付帯工事として架け替えられたもので、4 径間、橋長 168.2m、幅員 9.5m（車道 3.5m×2+歩道 2.5m）です。平成 23（2011）年 10 月に竣工しています。



写真-12 生駒山から隈見橋を望む



写真-13 千種川右岸から隈見橋を撮影

■ モノローグ

筆者は、上郡土木事務所勤務時代に昭和 51 年災害を経験しています。昭和 51（1976）年 9 月 8 日から 14 日までの 7 日間ぶっ通しで降り続いた豪雨災害です。何日目か忘れましたが、雨が少し小降りになったので、事務所前の千種川右岸堤防上から千種川を見ていると、濁流が上郡橋や隈見橋の桁にぶつかって白いしぶきが上がっていました。橋はもちろん通行止め、川の中ほどはうねりで堤防よりも高く盛り上がり見えました。今回、これらの橋の歴史を調べていて、当時の記憶が蘇ってきました。

今は、床上浸水対策特別緊急事業により川幅も広がり、橋も架け替えられて、ずいぶん洪水に対する安全性は向上していますが、地球温暖化等の気候変動による豪雨災害の激甚化・頻発化の可能性が指摘されている状況を考えるとまだまだ安心できる状況にはありません。川の洪水処理能力を向上させることはもちろんですが、川への負担を少しでも減らすことも併せて考えていく必要があります。

吉本興業・西川きよし師匠の座右の銘です。「小さなことからコツコツと！」

【参考資料】

- 1 『むかしの西播磨～絵葉書に見る明治・大正・昭和初期』 藤木明子編著 平成7年4月
- 2 『生駒山』 播磨の山々ブログ
<https://dfm92431.hatenablog.jp/entry/2019/10/13/180223>
- 3 『ビャクシン』 感動樹木HP
http://www.kandoujumoku.com/jumoku_midokoro/byakushin_HP/byakushin.html
- 4 『かみごおり紀行～町史百話』 上郡町 平成19年3月
- 5 『赤穂郡誌』 私立赤穂郡教育会編 昭和48年2月
- 6 『国道373号、院宣』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 7 『赤松円心』 上郡町HP
<https://www.town.kamigori.hyogo.jp/soshiki/somuka/gyomuannai/10/1/6263.html>
- 8 『写真アルバム 赤穂・相生・上郡・佐用の昭和』 樹林舎 平成28年12月
- 9 『赤穂・相生・上郡・佐用今昔写真帖』 株式会社郷土出版社 平成18年7月
- 10 『隈取り』 語源由来辞典

ビャクシン (柏楨)

ヒノキ科ビャクシン属の常緑針葉高木。中国、日本で古くから庭園に植栽され、社寺などでは樹齢1000年を超えるものもある。ビャクシンの姿形が禅の教えに通じているとして、特に禅宗の寺院にビャクシンが多く植えられている。樹勢は強く、幹が腐朽し空洞化しても生きている。樹形は不整形。幹はねじれがちで、葉の付いた枝はすべて上に向かって伸び、全体としては炎のような枝振りになる。



写真-14 法雲寺のビャクシン (巨樹)

※発刊：令和4(2022)年8月 『ひょうご水百景』 No.155

改訂：令和8(2026)年4月 『ひょうご水百景』 No.155